
俺と未確認体とすらいむ

木間意等

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と未確認体とすらいむ

【Nコード】

N6730Z

【作者名】

木間意等

【あらすじ】

謎の未確認体が出現しそこからファンタジーな生物が出てくるようになる。世界は現代兵器を使い殲滅を図る。だが、その生物に効果は薄く殲滅は不可能だった。

世界はパニックになる。そんな時、世界はチカラを与えた。

道具に意志が宿り、それに触れると意志が目覚め「契約」しチカラを得る人はそれを「謎の法則」と呼んだ
それにより、パニックは終息した。

それから数年後……

採要 影見は

青い液体を踏んだ……

青い液体（前書き）

駄作だッ！……

青い液体

俺は自転車が壊れ
自転車を押していた。

「はあゝ何で壊れるんだよ我が自転車よ、何故だッ！……………」
「……………あああああッダメだ1人でしゃべるの悲しくなってきた」

まあ壊れるのは当たり前なんだよなあゝもう何年使われているか分からないからな、中古だしな。

「まあ考えたって仕方がないか」

独り言を言いつつ歩き初めた。

その時、

ふと、足にムニツとした感触がした……

何かと思いい下を見ると

青い液体があつた

そして

動いていました……………

「何コレ…………？」

青い液体……………？

まさか未確認体じゃないよな？

「いや、こんな所にいるわけがないな。」足を退けてみると
動かなくなった。もう一度踏んでみたら動いた。

「なんなんだコレは……………触って大丈夫か……………？」

指でつついてみる限りは大丈夫そうだな」

そう自分で結論を出して、触れてみようとした。

そして指が触れた瞬間に

『キイイイイーン』 耳をつんざくような音が響いてくる。周りの風景が変わる。頭にノイズがはしる。周

「なんなんだコレは……何なん「キイイイイーン」」

音が大きくなる。

頭が割れそうだ。

「があ……ぐ……あ……」

不意に音が止んだ。

代わりに聞こえたのは

『契約完了』

だった。

俺とスライム？（前書き）

文章力がない……

俺とスライム？

気がつくと倒れていた。

「何だったんだよいまのは？」

立ち上がり自転車を立たす。そして気付いた

青い液体が

かごに乗っていた……

「何で……？さっきは地面にあったのに……。第一、何でこぼれないん」「うるさいわすこししずかにしろ」「ん？」

誰か喋った？

周りを見渡すけど

周りには誰もいない……

「つまり、コレ（青い液体）なのか、喋ったのは」

「まったくひとがきもちよくねてるというのに。」

…確定だこの青い液体が喋っている。

あれ？

「ちょ、ちょっと……あー何て呼べばいいんだ。スライム？」

さすがに、スライムはないか。

「すらいむ？それでいい。」

「あーはいダメで……ッていいのかよっ！。それはともかくお前は何なんだよ。」

「え？すらいむだよ。」

「そうじゃ無くて…まあ合ってるんだけど。お前は未確認体じゃないのか？」

「みかくにんたい？すらいむだよ？……きみと『契約』した。」

「そんなバカな……」

契約？何かの冗談だろ…

契約は意志が宿った道具とだけのはずじゃないのか……？

俺とスライム？（後書き）

.....
点が多いな.....

用語説明（前書き）

文章力が………

用語説明

『契約』

一般論

これは意志が宿った休眠状態の道具に触れることで意志が目覚め、その時に有無を言わせず相手の了承も得ずに結ばれる。これにより人はチカラを得る。

契約した者は契約者と言われる。契約者は学生の割合が高い。契約内容やなぜ契約者は学生が多いのかなど様々な点が不明。

『チカラ』

一般論

契約したことにより使えるようになるものや未確認体に対抗できる力のことを言う。最近魔法、超能力とも言われる事もある。

一説では異次元の力を引き出しているという。

（別次元という説もある）

研究が続いているがいまだに様々な点が不明。

『未確認体』

一般論

日本海に出現した未確認の生物。そこから出るファンタジー世界に出て来そうな生物は、未確認生命体と言われる。（未確認体から出て来た生命体のため）またこれらには未知の物質も含まれており、皮肉にも現代科学は発展した。

ごくまれに未確認体から離れた場所に生命体が出現する事もある。また、出現と同時に巨大な島が出来、安全地帯に契約者育成の施設がある。

『謎の法則』

一般論

これらの未確認体が出現する前には存在しなかった法則のこと。

用語説明（後書き）

温かい目で見守って下さい

とある会話（前書き）

文が醜い……

とある会話

白衣を着た女性が言う

「はい。見つけた」

ショートカットの少女が言う

「よく見つけましたね」

「この島じゃないんだから簡単よ。第一、場所を特定するだけなんだから」

「まあ確かにそうなんですけど自分のチカラの強さを自覚して下さいよ。感知する距離、異常なんですからね」

「そんなに買いかぶらないでよ戦闘はできないんだから。あと、この感知範囲は機械のおかげなのよ？」

「自分だって言えたもんじゃないだろ？剣を振り回す癖に。むしろお前のほうが異常だろう」

二人以外に誰も居ないのに声が聞こえる

「う、うるさいわね」

「仲良いのね」

「「違う（わ）」」

「何でハモるのよッ！」

「仕方がないだろうが！」口論になる。

数分後

「絶対仲良いわよね？」

「「ちが「ハイハイ分かった分かった」」」

「分かったから搜してきてくれる？優秀な貴女に頼みたいの。」

「はい…分かりました」

「じゃあお願いね？場所は日本、東京、青瀬市、市の中心から南東側で、いつも通りに高校生を中心に探してね？」

「探すと言っても結局あなたの機械で探す事になるのに……」

「まあ、仕事を頼まれたからにはしっかりな。」

「じゃあ頑張つてね」

「はい。」

「了解。」

少女が歩いて部屋から出ていく。

部屋に残った白衣の女性が独り言を言う

「嫌な予感がするのよね。大丈夫かしら？」

俺の異常な日常

頭が痛くなりつつもすらいむ？をポケットに入れて、（体の大きさが変わって入った）家に帰った。

自転車を停めてドアを開ける。

「ただいま。」

中からの声は無い。

「ただいま？」

「疑問係でただいまを言うな。第一ここは俺の家だ。お前の家じゃないからな。」

「おれのものはおれのもの、おまえのいえはおれのもの。」

「ジャ アンみたいに言うな！」

入ってすぐのリビングにスライムを投げる。

「ぺちやつ」

「嫌な音だな。」

「なげたおまえがわるい。」

「だ・ま・れ。」

「だまるくちがない」

「クッソ言い返せない。」

「着替えてくるからそこにいろよ。移動するなよ。」そう言い、階段を上げる。二階で制服を着替える。

俺は第三青瀬中学校の二年生だ。一週間前に二年になったばかりだ。何故こんなことになったのか全く。

そう考えているうちに着替えが終わる

着替えた俺はリビングに座る。

「で、お前の名前は？」

「だから、すらいむだよ?」

…駄目だこいつ…………

「もうそれでいいよ。じゃあ、契約ってどういうわけだ?」

「あのときぼくは……………ねていた。」

「寝てたのかよっ!」

「だから、しらない。」

「やっぱりそうだよ。当たり前ですよ。予想つきました。」

「いましつれないことかんがえただろ?」

「無駄に鋭いな…………。で、何であそこに居たんだ?」「しらねえ」

「ふう、全く何なんだよ。」

そう言いつつ立ち上がり、冷蔵庫を開ける。冷凍食品を取り出し解凍するために電子レンジに入れ「なにそれなにそれなにそれ?」
くッ、うるせえッ!

数分後…………

「チーン」

ドアを開ける。冷凍食品を取り出し、テーブルに置こうと…………

「テーブルを汚すな」

スライムがそこらじゅうに散らばっていた。

「ぼくきれいだもん。」

「はあ、もう分かったからはいくつに戻れ。」

「へーい。」

物凄い勢いでスライムが集まる。

きれいになったテーブルに冷凍食品を置く。

よし、食べるか。

「いただきます?」

「何でもかんでも疑問係にするな!」

「そう言えばスライム、お前、食べ物食うのか？」

「たべるたべる。」

「本当か？」

唐揚げを箸で投げつける。

唐揚げにスライムがついた瞬間、

「ジュジュッ」

嫌な音がした。

唐揚げが…一瞬で溶けた…「おいおい、あんな危険な物に俺は触ろ
うとしたのか……………」

「ふう。ひとをきけんといいきるとは……………」

「お前は人じゃないだろうが！。スライムって言うてただろ？」

「ちっ」

「今舌打ちしたよな！」

「してないしてない。」

「クッソ。ムカつく。」

会話が続き夜は明けていった……………

俺の異常な日常（後書き）

文が……

朝とすらいむ

「ぐッ……かはッ……ごはッ。」

飛び起きる。

顔に何かついている。

必死にひっぺがす。

「ぐはッ……はぁ……はぁはぁ。」

外れた。

「朝っぱらから殺す気かッ！」

くつついていたのは……予想通りスライムだった。「ころすきないよ？ちつそくさせるつもりだよ」

「止めるよ。「窒息」イコール「死」だよ！」

「だいじょうぶしなないから。」

「その自信は何処からくるんだ？。お前まだ昨日のことを根にもつてるのか？」

昨日は大変な日だった……

スライムを踏み、

契約したつばい、

スライムと口論する、

スライムが風呂の水で遊ぶ、

ベッドに飛び散る。

散々だッ！

「全く、アレはお前が悪いんだからな。」

「わかってる。ばくがおこっているのは、きみのねぞうがわるいからだ。」

「はいはいすいませんでした。」

俺は昨日知った。反論すると面倒なことになると。

二階に降りて取りあえずカップ麺を取り出そうとして、時間に気付く、7時2分。昨日自転車が悪れた俺はバスに乗るしかない。

ヤ・バ・イ……………

チキ ラーメンをそのままかじり、急いで着替える。

「行つてきます。」

その時俺は気付くべきだった。返事が無いことに……………

朝とすらいむ（後書き）

文が死にそう

やっちまった……やっちまったよ……

「間に合えッー！」

あと、少しでバスが来る。ヤ・バ・イ。

数十分後

「セーフ」

バスが来た直後に着いた。あー危なかった。

ポケットから電子マネーを取り出し、機械にかざす。「ピッ」電子音がなったのを確認し、バスに乗る。

「ふう、これで休める。」

休めるというのは、2つの意味がある。まず「走って疲れた。」もう1つは「スライムが居ない。」だ。話につき合う必要が無いのは、最高だ。因みに無視したらまとりについてきて面倒なことになった。全く、

「ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ。」
と言いつけるなんて……どんな拷問だよ。

1人は良いな、最高だ。そうだ口に出してみよう。

「1人最高ー」

……駄目だ。完璧に独り言だ。友達居ない人みたいだ。悲しくなってきた。

そう考えているうちに目的のバス停につく。

再び機械に電子マネーをかざしてバスから降りる。

腕時計を見る、時間はまだある

「ゆっくり歩くか。」

そう言つて歩き出した俺には、学校への道が酷く遠い気がした。

校門に着いた時には周りに登校する人が居ない。つまりそれくらい遅く着いたと言うことだ。

この学校は遅刻した時のペナルティがすごい。まず反省文、これは恐るべきことに先生が枚数を決めるといふ。ああ、恐ろしい。因みに過去最高枚数は10000枚だ。書かされた人は全てごめんなさいを書いたらしい。思わずツツコミたくなるかも知れんが、スル―だッ!。

2つ目は放課後に最終下校時刻までノンストップで説教される。大したことでは無いと思う人もいるだろうが中学生にとっては致命的なのだ。

いかん、考えている内に教室に着いてしまった。

因みに2年のクラスは6組あり、A B C D E Fとなっている。俺のクラスはBだ。

あ、いッけね。今日体育だ。

「体操着持ってきたっけ？」

バックを開ける。

「.....やっちゃまったぜ.....。」

やっちまった……やっちまったよ……（後書き）

もしよかったら、感想、悪い点など、お願いします

学校の日常？

やっちまったよ……………まさか……………まさか…バックに…スライムが入っていたなんて…。気づくべきだった。家を出る時に返事が全く無かった事に。

「おいスライ」すうゝ、すうゝ」
寝てるし……………。

周りを見回す、誰も居ないな？よし隠蔽工作だつ。
まず、トイレに入る。個室に入り、水筒を開ける。

「よし、詰め込むか……………」
スライムを水筒の中に入れる。そして水筒の口を思いっきり閉める。
「ふう。これで大丈夫だ。」

それから、何事も無かったように教室に入って行った。

ああ、そう言えば体育着はあった。

自分の席に座る。するといつもの様に隣の女子が話し掛けてきた。

「おはよう、かげくん。今日は随分と遅いんだね？」

この女子は佐藤 恵梨さとう えりで1年の時に仲良くなった。成績は中の上くらいだ。容姿は整っている。美少女だ。

「決して寝坊したわけじゃないぞ。自転車が壊れたんだ。」

「そりゃ災難だったな。」後ろから声がする。

こいつは矢場 健太やば けんたで2年の最初の時に話し掛けてきて気が付いたらこんな風になっていた。成績は優秀。こいつも容姿は良い。つまり美男子。

全く、矢場なんて何処がどうヤバいんだが。

「今失礼な事考えただろ？」

くっ、鋭い！

「はて、何の事やら。」

「そうだよ。人を疑うのは良くないよ。矢場くん。」

「……………プッ」

「おい、今こいつ笑ったよな？……………」

「キンコーンカーンコーン」

チャイムが鳴った。

今は昼飯の時間だ。

何故こんなに時間がたつのが早いのか？簡単だ。授業中に寝ていたからだ。

簡単に言おう。俺こと採要さいよう 影見かげみは、成績が悪い。あくまで「成績が悪い」だ。テストでは平均点はとっている。忘れ物もしない。だが、授業態度が最悪なのだ。

大体寝ている。しかし問題を出されると、完璧に答える。頭は悪くは無い。しかしバカだ。（生活面で）自分で断言出来るほど。

「あれ？かげくん、弁当は？」

おっと、考えすぎた。

「悪い、ちよつと考えててな。」

「だから弁当は？」

「いや、忘れちゃったんだよ。」

「何だと！？まさか忘れ物はしないはずのお前が忘れるとは。」

「いや、ちよつとね……。」

「私の少しあげるよ。」

「いや、ちよつと……。」

佐藤の弁当は女子らしく男子の弁当より遥かに小さい。

「仕方がない。俺も分けてやろう。」

反論する隙もなく、言ってくる。

「じゃあ、私の弁当箱の蓋に置いておくね？」

そう言い、玉子焼きを置く。

「俺は唐揚げとご飯を。」二人は俺に何もさせなかった。因みに二人共手作りだ。

「はあ、ありがとな。」

そして、俺はありがたく二人の美男子と美少女の手作り弁当をいただいた。

「あの野郎、佐藤さんの手作り弁当を……。」

「矢場君のを……。よくも……。」

美味しくいただきましたが、男子と女子からの視線に殺意がこもっていました。（死ぬかと思いました。）

その時、皆気付かなかった。俺のバックが揺れていることに。

体育：そして

昼休み、俺は気づく。バックが揺れていることに。

中を見ると水筒が暴れていた……。

「ガンガンガンガンッガンガンガンガンッガンッ」

急いで水筒を取り出し、人が居ない1階のトイレへ急ぐ。その時、矢場が話し掛けてきた。

「おいどうした？」

「あ、いや……ちょっとトイレに。」

「水筒持つていく必要ないんじゃないか？」

このままだとスライムがバレる。ヤバいぞ。矢場だけに。どうする？

「じゃ。」

逃げるに限る。

「ちょ、おま」俺はダッシュで暴れる水筒を持って1階へ。

中を確認し、トイレに入る。

「ガンッガンッガンガンッ」

開けるのが怖いな……

「今開けるから暴れるな。」

蓋をくるくる回して水筒を開ける。

「ポンッ」

いい音がしてスライムが出てくる。

「おまえ、ちつそくさせるつもりか！」

「お前は窒息しねーだろ！第一お前が朝俺にやったことと一緒にだろ
うが！」

「ちっ」

「舌打ち好きだなお前。あと静かにしろ。」

「わかっている。バレたらまずいんだろ。」

「分かった。意外だ。」「いがいつていうな」まあともかく分かったのに何で来た？」

「暇だったから。」

「退屈しのぎに俺を巻き込むな。」

「もつておくれだ。どうしようもない。」

「どこのゲームのラストだよ！」

数分経過

「取り敢えず、お前は水筒に入れる、で持ち運ぶ。暴れるなよ。」

「りょうかい？」

「俺はツツコまねえぞ……」

「あ、5時間目体育だ。」「たいいくだー？」

「ふう、何でこの時期に1500メートル走んなきゃいけないんだよ。」

矢場に訊いてみる。

「基礎体力がどれくらいあるのかの確認だろ。」

「なるほど、ただ面倒くさいだけなのか。」

「ハッキリ言っなお前。」

体育の授業は唯一俺が寝ない授業だ。

「この授業だけは寝れ無いからな。」

「もう分かった解った。」

「今わかったを違う言い方をしたよな？」

「いや、気のせいだ。」

「そうか？」

「そうだ。で、何で水筒を持っているんだ？」

「気にしなくていい、無視しとけ。」

今俺達は校庭にいる。

体育の授業で男子は1500メートル、女子は1000メートル走るからだ。

しっかしなー、まさかあれを根にもつやつが多いとは。凄いこつち見てるんだけど……

あれとは昼の弁当の事だ。あんな軽く接しているが、矢場と佐藤の二人は人気者だ。勉強スポーツ容姿3拍子が揃っていて、性格もいい。

余談だが、二人は誰とも付き合っていない。矢場はコクられてもやんわりと断り、佐藤に限っては好きな人がいるので、と。全く佐藤にコクられて断るやつがいるわけが無いのに。なぜ佐藤はコクらないんだ。(と、言っても誰かコクられたら、そいつは男子に肅清されるだろう)

体育の安崎先生が言う

「さあ走るぞ。」

「へいへい。」と俺

「もつとやる気出そうよ」と矢場

スライムは水道の所に置いてきた。

「よいい、スタート」

皆一斉に走り出す

「やる気出す出さないの問題じゃ無くて、出ないんだよ。」

「それ、ただの面倒くさがりやじゃ無いのか？」

「否定しない」

「せめて肯定しようよ」

「最後の意地だ」

「下らないことで意地を張るなよ」

「……………」

あれ？今俺達今走っているよな？

何で運動神経抜群のスポーツ何でもできる人と並走できるんだ？疲れないし。

「あれ？よく並走できるね、やる気無かったんじゃないの？」

ヤバい、誤魔化さねば。

「意地だ」

「やけにプライド高いんだね？」

「プライドが高い？あいにく俺はサイ 人の生き残りのベータじゃ無いからな。」

「凄いいえだね……………」

結局最後まで矢場と並走した。矢場が抜いてくれたのもあるのだが、それでも後ろとの差は（俺にとっては）凄まじかった。

「やればできるじゃん。」

「俺はやればできる子なんだよ。」

「そうか…なら常日頃やることだな。」

後ろに安崎先生がいた。

1秒、2秒、3秒、

3秒で俺は謝った。土下座で。

「すみませんでしたっ！」

「お前は本当に調子狂うな。あと、お前の土下座は、軽すぎる。」
もういいから、といい許して？くれた。

安崎先生は生徒からの人気が高い先生だ。まあ多少熱血だが…。いい人だ。

あれ？視線を感じる？

「あの野郎……………」

にらまれてますねハイ

「ふう。全くクラスメイトに睨まれるなんて。」

ため息をついて水道の所を見たとき、

俺の水筒（スライム入り）が動いて……………

ダッシュだ――――！！

急いで水筒を拾う。そして開ける。中身を見る振りをしながら

「何やってんだ！バレルだろ？」

「……なにかくる……！」

「は？、お前何言ってるんだ……？」

ドンッッ

そして

不意に、地面が大きく揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6730z/>

俺と未確認体とすらいむ

2011年12月31日20時49分発行